

室内を照らす

むかし、電気がなく火が貴重だった頃、暗い室内では、炉やかまどの炎をたよりに生活していました。中世には、えごま油の産出が増え、^{おおやまざき}大山崎（京都）の油座商人が、全国に油を売り歩くようになり、油灯が一般に普及しました。油を使った灯りは、明治時代の電灯の普及まで広く使われていました。明治時代以降、電気による灯りが一般化し、野々市村では、明治34年に電灯がはじめて設置されました。



灯明（とうみょう）

灯芯^{とうしん}とよばれる植物（イグサなど）からとった芯を油でひたし、それに火をつけて灯りとなりました。灯明に使った土師器皿は、市内の中世の遺跡からも多数みつかっています。



行灯^{あんどん}（鈴木春信『座敷八景』より）江戸時代の室内の灯りで、箱状の枠に和紙をはり、中に油の入った皿を置き、火を灯しました。

主な庶民の灯りのうつりかわり

古代 中世 江戸 明治 大正 昭和 現在

油灯



燈明皿、行灯

電灯



LED



ろうそくが一般に普及したのは江戸時代中ごろでした。



電池式の電灯